

問題一 次の文章を読み、後の問に答えよ。

吸い物に今も塗り物が用いられるのは全く理由のあることであって、陶器の入れ物ではああはいかない。(中略) 漆器の椀のいいことは、まずその蓋を取って、口に持っていくまでの間、暗い奥深い底の方に、容器の色とほとんど変わらない液体が音もなくよどんでいるのを眺めた瞬間の気持ちである。人は、その椀の中の【一】に何かあるかを見分けることはできないが、汁がゆるやかにドウヨウするのの上に感じ、椀のフチがほんのり汗をかいているので、そこから湯気が立ち昇りつつあることを知り、その湯気が運ぶ匂いによって口に含む前にほんやり味わいを予覚する。その瞬間の心持ち、スープを浅い白ちやけた皿に入れて出す西洋流に比べて何という相違か。それは一種の神秘であり、禅味であるとも言えなくはない。

私は、吸い物椀を前にして、かすかに耳の奥へ沁むようにジイと鳴っている、あの遠い虫の音のような音を聴きつつこれから食べる物の味わいに思いをひそめる時、いつも自分が三昧境に惹き入れられるのを覚える。茶人が湯のたぎる音に尾上の松風を連想しながら無我の境に入るというのも、おそらくそれに似た心もちなのであろう。日本の料理は食うものでなくて見るものだと言われるが、こういう場合、私は見るものである以上に瞑想するものであると言おう。そうしてそれは、【一】に瞬くろうそくの灯と漆の器とがガツソウする無言の音楽的作用なのである。かつて【i】先生は「草枕」の中でようかんの色を賛美しておられたことがあったが、そう言えば、あの色などは、やはり瞑想的ではないか。玉のように半透明に曇った肌が、奥の方まで日の光を吸い取って、夢みる如きほの【ii】を含んでいる感じ、あの色合いの【iii】、【iv】は西洋の菓子には絶対に見られない。クリームなどは、あれに比べると何という【v】、【vi】であろう。だが、そのようなかんの色合いも、あれを塗り物の菓子器の中に入れて、肌の色がかるうじて見分けられる暗がりへ沈めると、ひとしお瞑想的になる。人はあの冷たく滑らかなものを口中に含む時、あたかも室内の暗黒が一個の甘い塊になって舌の先で融けるのを感じ、本当はそううまくないようかんでも、味に異様な深みが添わるように思う。

けだし料理の色あいはこの国でも食器の色や壁の色と調和するように工夫されているのであろうが、日本料理は明るい所で白ちやけた器で食べては確かに食欲が半減する。たとえば我々が毎朝食べる赤味噌の汁なども、あの色を考えると、昔の薄暗い家の中で発達したものであることがわかる。私はある茶会に呼ばれて味噌汁を出されたことがあったが、いつもは何でもなく食べていたあのどろどろの赤土色をした汁が、おぼつかないろうそくのあかりの下で、黒漆の椀によどんでいるのを見ると、実に深みのある、うまそうな色をしているのであった。

その外しようゆなどにしても、上方では刺身や漬物やおひたしには濃い口の「たまり」を使うが、あのねっとりとした艶のある汁がいかに陰翳に富み、闇と調和することか。また白味噌や、豆腐や、かまぼこや、とろろ汁や自身の刺身や、ああいいう白い肌のものも、周囲を明るくしたのでは色が引き立たない。第一、飯にしてからが、びかびか光る黒塗りの飯びつに入られて、暗い所に置かれている方が、見ても美しく、食欲をも刺激する。あの、炊きたてのまっ白な飯が、ぱっと蓋を取った下から、温かそうな湯気を吐きながら黒い器に盛り上がって、一粒一粒真珠のように輝いているのを見る時、日本人なら誰しも米の飯の有り難さを感じるであろう。こう考えてくると、我々の料理が常に陰翳を基調とし、【一】というものと切っても切れない関係にあることを知るのである。(谷崎潤一郎「陰翳礼賛」)

問一 傍線部①②④のカタカナを漢字に改めよ。

問二 【一】に入る語は何か。文中の語(漢字一字)を書き抜くことで答えよ。

問三 傍線部③⑦の漢字の読みをひらがなで示せ。

問四 傍線部⑤を分かり易く言うと、どういうことになるか。次から選び符号で答えよ。

ア 優れたシンフォニーのようにうまく溶け合っている響き。

イ 音にはならないが、音楽のように美的感覚を刺激する働き。

ウ 解説の必要がないほど、相手に直接伝わる音楽の働き。

エ 静かなトーンで人の心を打つ、宗教音楽の如き荘厳さ。

問五 空欄 i に「草枕」の作者名を漢字で入れよ。

問六 傍線部⑥と同じ「ようかん」を指す、七字以上、十一字以下の語句を文中から書き抜け。

問七 空欄 ii、iii、v に当てはまる語を次から選び符号で答えよ。

a 暗さ b 明るさ c 深さ d 軽やかさ e 浅はかさ

f さわやかさ

問八 空欄 iv、vi に当てはまる語を次から選び符号で答えよ。

1 複雑さ 2 単純さ 3 難解さ

問九 傍線部⑧はどういうものによって添えられるのか。文中の五字の語句を書き抜くことで答えよ。

問十 傍線部⑨の意味を次から選び符号で答えよ。

ア 本来 イ 妙に ウ 多分 エ 実に オ 殊に

カ 結局 キ 実際

問十一 問題文は三つの形式段落から成るが、第四段落中の擬人法が用いられている箇所を書き抜け。

問題二 次は、名取洋之助「写真の読み方」の抜粋である。読んで、後の問に答えよ。

写真は、一枚の写真として見る限り、かなり使いにくい記号ですが、《 1 》によって、【 a 】、この使いにくさ、記号として一枚写真の制約から脱することが出来ます。

ただ、写真は、何といても抽象的であるだけに、あまりにもいろいろに読めてしまいます。見る人の趣味や教育・教養の程度、政治的・社会的な興味の違いが、写真の《 2 》を変えてしまいます。【 b

【 1 組み写真の場合には特に、作者の意図を正確に読者に伝えるためのシチュエーションな用意と十分な《 3 《 が必要で、同じねらいの組み写真であっても、読者層が違えば、当然、写真の選び方も、並べる《 4 《 も違っていないければなりません。

このように写真を一つの記号として考えることは、写真の歴史のうちでごく最近、それも映画の理論の影響を受けて始められたものですが、これからの写真、特に私たちが日常目にする新聞や雑誌の写真をよく理解するためには、《 5 》としての写真の特性を心得ることが必要となってきます。今までには、コミュニケーションの手段として使われている写真でさえ、【 c 】【 1 美術品でもあるかのようにカンショウされることがあまりにも多すぎました。《 5 》としての写真を単なる美術品としてカンショウすることは、甲 ですが、そういうことがあまりにムゾウサに行われていました。写真の嘘に引かからないためにも、《 5 》としての写真の特性がもっと広く知られることは、【 d 】【 必要なのではないのでしょうか。

問一 問題文は三つの形式段落から成っている。第二段落には概念の上で反対の語が用いられているために、意味の通じなくなってしまう部分がある。その語（漢字三字）を書き抜き、正しい語に直せ。

問二 傍線部①はどういうことを言っているのか。第二段落から一つの例を書き抜け。（十五字以内）

問三 傍線部②③④のカタカナを漢字に改めよ。

問四 空欄《 1 》《 5 》に適する語を後の語群から選び、符号で答えよ。

〔語群〕 ア 読み方 イ 組むこと ウ 記号 エ 計算

オ 順序 カ 撮り方

問五 空欄【 a 】《 d 》に適する語を後の語群の中から選び、符号で答えよ。

〔語群〕

- 1 それだけに
2 ぜひと
3 ある程度
4 あたかも
5 もっぱら

問六 甲 に入る語句としてふさわしいのは次の内のどれか。適するものを選び符号で答えよ。

- ア 一本一本の木に気を取られ、森全体を見ないようなもの
イ 自分では映画を見ずに、見た人の話を聞いて論評するようなもの
ウ 演説の内容を聞かずに、声のよしあしだけを論じるようなもの
エ たとえ腐つていても、「何しろ鯛なんだから」と思うようなもの
オ つまらない木っ端を拾って、大事な材木を流すようなもの

問題三 次は、太宰治の小説「富嶽百景」の一部である。読んで、後の問に答えよ。

富士の頂角、広重の富士は八十五度、文晁の富士も八十四度くらい、けれども、陸軍のジツソクズによつて東西および南北に断面図を作つてみると、東西縦断は頂角、百二十四度となり、南北は百十七度である。広重、文晁に限らず、タイテイの絵の富士は鋭角である。頂角が、細く、高く、華奢である。北斎に至つては、その頂角、ほとんど三十度くらい、エツフェルトツウのような富士をさえ描いている。けれども、実際の富士は、鈍角も鈍角、のろくさと広がり、東西、百二十四度、南北は百十七度、けつして秀抜の、すらと高い山ではない。たとえば私が、印度かどこかの国から、突然、鷲にさらわれ、すくと日本の沼津あたりの海岸に落とされて、ふと、この山を見つけても、そんなに驚嘆しないだろう。ニッポンのフジヤマを、あらかじめ憶れているからこそ、ワンダフルなのであつて、そうでなくて、そのような俗な宣伝を、いつさい知らず、ソボクな、純粹の、うつろな心に、果たして、どれだけ訴え得るか、そのことになるかと、多少、心細い山である。低い。裾の広がっている割に、低い。あれくらいの裾を持っている山ならば、少なくとも、もう一・五倍、高くなければいけない。

広重・文晁・北斎：三人とも江戸時代の絵師。

問一 傍線部①②④⑥のカタカナを漢字に改めよ。

問二 傍線部③⑧の漢字の読みを平仮名で示せ。

問三 傍線部⑤の理由を二つ述べよ。

問四 傍線部⑦はどんな心か。本文の内容にのつとつて、十字以内で答えよ。

問五 次の中から太宰治の作品を二つ選び、符号で答えよ。

- | | | |
|--------------|-----------|------------|
| A 高瀬舟 | B 吾輩は猫である | C 斜陽 |
| D 生まれ出ずる悩み | E 伊豆の踊子 | F 注文の多い料理店 |
| G 人間失格 | H 死者の奢り | I 城の崎にて |
| J セメント樽の中の手紙 | | |

問題四 四字熟語の多くは「夏炉・冬扇」や「白砂・青松」のように「□□+□□」(二字プラス二字)の構成になっているが、そうでないものもある。では、次の四字熟語の中から「□□□+□」(三字プラス一字)構成のものを二つ見つけ、符号で答えよ。

- | | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| A 七転八起 | B 面従腹背 | C 和魂洋才 | D 五里霧中 |
| E 油断大敵 | F 一騎当千 | G 牛飲馬食 | H 自画自賛 |
| I 朝令暮改 | J 愛別離苦 | K 深謀遠慮 | L 起承転結 |
| M 花鳥風月 | N 十人十色 | | |

【特待生入学選抜試験 国語総合】 解答用紙

令和六年三月十四日 実施

受験番号【

】氏名【

】

問題一 問一 ① ② ④ 問二

問三 ③ ⑦ 問四

問五 問六

問七 ii iii v 問八 iv vi

問九 問十

問十一

問題二 問一 誤 ↓ 正

問二

問三 ② ③ ④

問四 1 2 3 4 5

問五 a b c d 問六

問題三 問一 ① ② ④ ⑥

問二 ③ ⑧

問三 一 二

問四 問五

問題四